Community & Friend
2022 年 8 月号
有限会社アルファー
大阪府高槻市氷室町 4-13-3
吉田 清一郎

平素は、弊社商品にお取り組み頂き、
まことに、ありがとうございます。
月間通信 8 月号をお送り致しました。
何卒、よろしくお願い致します。

原油価格チャート、中央付近のピークは 6 月 8 日
既に 2 ヶ月ほど前から下げ続けている。それでも原油高を値上げの理由にしますか。

Assassination

いきなりこんな表題のメールが米国から届いた。着信は 14:22。メールの現地時刻は マイナス 16 時間の、前日 PM10:22 だから、少しゆっくりしていた時間帯かな。おそらくパソコンでもいじっていて、News Site から飛び込んで来たのだろう。

まったく知らなかったし、米国で何かあったのかと思ったが、ふと『そんな訳はないな』と思い直し、こちらも検索すると、なんと安倍晋三が撃たれたと出て来た。

先ず、手製の銃だとの事だったが、そんなに命中率の高いものなのかと疑った。何か背後のある実行犯なのか、そんな噂に出ている程度なら、以前から知っているしそれはそれで としか思っていなかったが、もしかしてその背後の背後にまだ絡みがあるとしたら、これはこの国の近い将来に影響を与えかねないと思える。

今の時期、安倍晋三という人物がどのような路線にこの国をリードしていたのか、薄々ながら知っていて、それはもっとも此処に書くこの国らしく、正解だと思っていた。まさしく政治ってのそういう事だと思っていた。残念ながら現総理は其処迄思慮深く無さそうだから、先の G7 で吹き込まれた通り、張り切って踊ってるんだろう。それがどれだけこの国を窮地に追いやるのかなんて考えもしないで・・。

かつて我が社員に『社長はバカほど良い』と言われたことがある。そういうお前がバカほど良いと思われている事を知らないのかと思ったが、あの領域まで進んでしまえば、何を言っても馬の耳に念仏だろうと、呆れた顔をしてジッと眼を見たが、得意に浸っている目をしていた。ホント全部が全部じゃないが、人間てのは愚かなところを如何しようもなく持っているみたいだ。

ひとつ長い目で見てみよう。

これから先しばらくは、親米国と非米国に分かれる。この米国を軸に『親と非』で表現するのは言い得て妙だ。つまり Yes or No だ。これは相当に面白く、西に向かうという輩がいれば、東に向かうという輩もいる。分かりやすい連中だ。いわゆる旗色を明確にするってやつだ。ところが、この日本という国は Yes No をハッキリ言わないという特徴がある。白黒ハッキリ竹を割ったような性格という表現があるが、決して世界はそんなに単純じゃない。白黒混ぜた灰色ってのがあり、この濃淡たるや切りがない。しかもこの間にこそ真実がある。

正があれば反があり、彼等の好きな弁証法というのは、必ずその上に合が存在する。しかもその合が成立するや否や、その反が生まれる。つまり永遠に合が存在し、ここに階層がある。ところが賢い人には、階層無く『正』も『反』も『合』も同時に、今も、昨日も、明日も、此処にも彼方にも、存在する。なのに、正と反を階級という言葉にすり替え、ここに『闘争』という

非生産的な概念を生み出したのが、カール・マルクスという人物ではないかと思う。彼が彼のスポンサーに果たした功績は、この階級闘争の影に『合』を隠したところにあるのでないか。今回の暗殺事件発生の下地は、こういうところにあると思う。

『日本で暗殺事件が起こるというのは、どういう事なのでしょうね。桜田門外の変、1860 年だったか、'それを思わせる』とだけメールには書いてあった。あの事件は我が彦根藩主、時の江戸幕府大老井伊直弼の鎖国を解く条約締結に異を唱え、正確に状況分析を怠り、短絡的に『殺してしまえ』との結論を行動に移した結果だった。何が正しかったのか過去の検証は困難で、勝負ごとに「もし」は禁句なように思うが、着目しているのはメールにある「日本で・・・」というところにある。

もちろんメールの主は長く米国に居住しているとはいえ、私同様出自は日本である。おそらく同じ時期に西から移動して来た民族の血を引いていると思われる。問題はその同化した血ではなく、もっと遥か以前に辿り着いて元々この列島の東と北に住んで来た血である。遺伝子と言ってもいい。

国破れて山河も無く、流浪の旅に出た民族が、どこに言っても差別を受け、迫害され、塗炭の苦しみから金融という技を生み出し、世界に君臨した。ところが同じ民族でも、『東方に理想の国家がある』と導かれこの列島に辿り着いた一派は、他所に移住したその他とは全く異なり、この地に自分たちの宗教も同化させ、言葉までも同化させて融合した。この事実について沢山思うところがあり、いずれしっかりと書きたいと思うが、今月は話しがズレるためやめておく。つまり、先の Yes or No を明確にせず、対立より調和を見出そうとする文化・風土を生み出したという事実のみに留めたい。何故ならこの文化風潮がものを言う時代はもう少し先の事になると予想しているからだ。

ここでは、金融という技を生み出し世界に君臨しているグループが次の一手をどのように打とうとしているのか、こちらの方が即時性に於いて重要だと思う。

価値と価格に分けて考えてみてほしい。

私たちの欲の中に、価値を欲しがることと、貨幣を欲しがる事とに、分けてみると、後者は同じ価値の物でも将来それが高値で取引される事が見込まれると『今買って先の高値で売り逃げれば』と投機という名の貨幣が動く。上手く行けば・・・とほとんど博打のようなもの。ところが天性の博打は空気が読める。読めればこの博打は勝てるに決まっている。自分にもこんな天性を親がつけてくれていて、それを磨くことが出来ればと憧れを抱いてしまう。残念ながらこの手の才能はなく、従ってコツコツと生真面目に働くしかない。

でも、そうして働いてみると、とてもそんな事には興味を持てなくなる。つまり貨幣を欲しがるより価値を欲しがっている方が余程生きる過程は面白く、退屈しないで済むことが分かって来た。

今回の暗殺に世間で言われる背景はカモフラージュに過ぎず、実は彼がプーチンや習近平と仲良くする事が彼らの目的に合致しないのかも知れない。仮にそうだとするとこの国の世界における影響力というか、経済力はそれなりのものだとも言える。この世が資本対資本の戦いであるとするならば、より多くの資本を得る仕組みを作った者が勝つことになる。そして、その仕組みは人から独立して独り歩きをする。その様に考えると、冒頭の『日本で・・・』という前提は虚しいものになる。この列島は、Yes No を明確にして対立するのではなく、そこを曖昧にして互いを敬意を以って協調し、共存していくことで長年繁栄して来た。大東亜戦争を経て変ったとは言われるが、根本のところは総じて変らず堅持出来ているのではないかと思う。

本当は 8 月 15 日にその事を起こしたかったのではないかと邪推してしまうが、1971 年 8 月 15 日のニクソン・ショック以来、ドル中心に動く金融世界から、戦争をバネに本物・資源を中心に動く世界に換わる。実業でだって儲ける事が出来る。ただ、その儲けを何に使うかが問題だと友人は言った。

有限会社アルファー：吉田清一郎